－所蔵作品紹介－

関　兵衛　SEKI Hyoe

大雪山

たいせつざん

作品データはこちら

周囲を山に囲まれた盆地の旭川では、寒暖の差が激しく、夏は30度を超える日が続く一方、冬の平均最低気温はマイナス10度を下回る。

市街地からは、美しい大雪山の連なりをのぞむことができる。北海道中央に位置する大雪山の名はよく知られるが、実は「大雪山」という山は存在しない。北海道最高峰の旭岳をはじめ、2000ｍ級の峰が連なる高大な連峰を「大雪山」と呼んでいるのだ。本作は、大雪連峰の旭岳から愛別岳の山容を描いている。大雪の個々の山は、道内外の画家によって数多く描かれているが、このアングルの「大雪山」は旭川周辺の画家による作品が目立つ。この山容は、旭川方面から見た景観であり、地元の人間にとって慣れ親しんだ「大雪山」なのである。

旭川初の美術グループであるヌタックカムシュッペ画会は、この山を意味するアイヌ語から名付けられた。作者の関兵衛は、旭川画壇の父である高橋北修とともに、画会を創立した一人である。関は、1901（明治34）年新潟生まれ。明治以降に多くの入植者が流入した北海道では、大正期に各方面で活躍した人材の多くが本州生まれだった。10代半ばで渡道し、旭川の丸井今井呉服店に勤めた関は、20代のとき高橋北修と知り合う。当時、絵を描く者がほとんどいなかった旭川で、絵を描くことが好きな二人は自然と親しくなった。高橋によれば、「それを機に、つぎつぎと絵を描いている連中が集まってきた。」という。銀行員、印刷画工等、さまざまな職業の若者が集い、1918（大正7）年、ヌタックカムシュッペ画会が結成され、翌年、第１回展が開催された。当時の北海道では、旭川だけでなく、各地で美術グループ展が相次いで結成され、1925（大正14）年の初の全道規模の公募展、北海道美術協会（通称道展）創立へと続いていく。

その後も関は高橋とともに純生美術展を創立するなど、地元画壇の活動に貢献し、90歳という長寿をまっとうした。旭川画壇の創立を担った重要人物の一人であるが、これまで収蔵がなく、本作は、2017年度にはじめて収蔵された作品である。

旭川美術館だより「氷華」No.61（2019.３発行）「収蔵作品から」より